

中世佐伯氏の動向 (下)

源平時代より南北朝時代まで

東京 御手洗 一 而

(3) 南北朝時代の佐伯氏

鎌倉幕府の勢力率いの波紋が佐伯氏に及ぶのは、七代
惟仲の時代である。幕府は源氏から北條に移り、足利に
代わるとして、佐伯氏にあって、承久の乱以後の一
世絶は、わりおいに平穩な時代であったのだが……。

さて、一三三三年(元弘三年)五月になると、後醍醐天
皇は隠岐から伯耆国に入る。呼ぶ名は、かたやうに、三月
十三日には、肥後の菊池氏が反北條の旗上げをして、
大友・少貳は旗色を鮮明にせず、五月になつて北條高時
が新田義貞に敗れて自殺すると、同じ頃菊池氏は鎮西振
頼を再度攻略し、この時は大友氏も六代貞宗が参加し、
佐伯氏も大友氏の家人として従い、天皇方についている。

一三三五年(建武二年)十月、足利尊氏・直義は鎌倉に
旗上げし京都に向かう。はじめ天皇方に志じていた大友
貞義は、途中尊氏方に内応し、尊氏と大友氏の關係が生
じる。一度上京した尊氏も後醍醐新政府の天皇軍に敗
れ、九州に逃れる。以下その経過を追う女ながら、佐伯氏
の動向を探ってみよう。

(1) 足利尊氏と佐伯氏

先ず、都を追われ兵庫に逃れた尊氏は、赤間ヶ関に向

かう途中、大友氏泰(千代松)に宛てた依頼の文書が残さ
れているから、大友一族は当時家人を含めて、尊氏方に
協力していたと見られる。同文書は延元元年(一三三六)二
月二十九日の日付になっている。

三月二日、尊氏は多々良浜の決戦に天皇方と戦り、勢
力とを返す。四月三日博多港から東上するが、後醍
願の憂いなくすため、日州肝付氏討伐の催促状を、出発
前の三月二十日に佐伯山城守宛、三月二十八日に佐伯備
前守に出している。備前守は七代佐伯惟仲であり、山城
守は孫の惟賢のことである。豊後武士団は、尊氏の東上
作戦に従軍した角蓮一揆と残留組に分かれるが、佐伯氏
は尊氏方であつたと思える。尊氏が上洛後、天皇方は九
月に懐良親王と征西將軍として九州に派遣し、後醍醐
天皇は十二月吉野に入り、菊池武重は急速九州に帰国し
ている。

尊氏は光厳院を天皇に立て、ここに南北朝時代が始ま
る。このころ、南朝天皇方の新田義家(越前)や、北島
頭家(和泉)も相ついで戦死し、尊氏は一三三八年(延
元三年)八月、室町幕府を開いた。
この間、佐伯惟仲は肝付兼重が大隅に敗退するまで、
この討伐戦に従軍していたと思われる。

(4) 懐良親王と佐伯氏

九州も南北朝の対立がはげしくなるが、官方の中心
は菊池氏であつた。しかし、菊池武重は、武家方の少貳
頼尚に連れられ、一三三九年七月頃病没し、官方は中心の
柱を失うことになる。この年八月、後醍醐天皇も病に倒
れる。翌一三四〇年(興國元年)八月十七日には、頼元(一
懐良親王に從つた武官)から、懐良小二郎(懐澄)に宛て
た阿蘇文書が残されている。その末尾は、

「唯今、このつかひおさと佐伯の方へつかはしたく候
あるまいさにてつけて給候へく候、諭旨を下され候程
にかたうに申候。重恩々謹言」

とあって、佐伯氏の一族に、誰か宮方に通じているふし
がある。佐伯氏の系図によると、山城守惟賢の妹が菊池
肥前守に嫁いでいるから、惟賢と肥前守は義兄弟の關係
にある。山城守惟賢は、当初所弁氏討伐に向かい、のち
に宮方の中心であつた菊池氏に通じていたのかもしれな
い。

患良惟澄がたついでに、ここで阿蘇氏をまとめてお
くと、尊氏が九州を去るとき、惟時が京にいたので、南
郷にいた燕子孫熊丸と大宮司に補任した。患良惟澄は、
はじめ惟時とともに東上したが、途中令旨が宮方へ転じ
ている。そして宮方は、この惟澄に宮方結集を依頼して
いるから複雑である。北朝系の孫熊丸大宮司、南朝方で
は、あるが態度のまつきりしない惟時大宮司、そして宮方
の患良惟澄と三者三様である。

さて前記の書状について、親王の所在が問題となる。
親王が伊予の勿那島に渡御した年について、一三三七年
へ延元三年と、同四年の二説があるからである。そして宮
の薩摩到着が一三四年へ興國三年へ五月とばつかりし、
忽那島の滞在も三年と明確にされていいるから、二年の空
白が出来ることになる。このことは、米水津鴻小浦の伝
承にみる佐伯荘との關係、つまり、兵船の遭難による避
難が、滞在するいは肥後入りの探索等、問題を提起する
ことになる。しかし、現在の通説では、忽那島の内紛が
治まった一三三九年へ延元四年へ渡つたとしていいるか
ら（伊予史精義）、同島の出發は興國三年となり、薩摩

到着が五月であることから、佐伯荘の長期滞在は認めら
れない。ただ、宮方が忽那島に渡つた翌年、すなわち阿蘇
惟澄と連絡をとり、佐伯氏とつながり、連絡を以て、
肥後入り、状況や地点を探っていた意志と用意周到さは、
充分に理解出来る。

しかし、一三四一年（暦応四年）の伊地知文春によると、
この年、佐伯義領家職は、戸次重前太郎頼時で預けられ
ている。このことは、佐伯氏がすでに武家方の制圧下に
おかれ、佐伯惟時は一三三九年の所弁討伐以後二年間に、
宮方よりを現わす最初の資料となつていいる。要するに、
この一三四一年（暦応四年）は、後村上天皇の諭旨や患
良親王の令旨があり、片や尊氏教書（伊地知文春）あり
で、保証のない一枚の紙片が飛び交い、佐伯氏は患良親
王が肥後入りをねらう勢力圏ではなかつたと思える。

ついでに、菊池武重をついで武敏もこの頃旅に倒れ夫
らしい。そして弟の武士が家督をつぐ。薩摩の津に着き、
谷山城に入つた親王は、一三四三年（興國四年）に南朝
勢力挽回を菊池武士に命じる。武士は阿蘇惟澄と兵を起
こすが、逆に大友氏泰によって菊池城と落とされ、責任
をとって家督を弟の武光にゆずるが、菊池氏の勢力もお
とろえ、親王は五年潮谷山城に足止めされることになる。

親王の命により、一三四三年（興國四年）、筑後や肥
後で菊池勢の動きがあつた頃、上杉系図によると、同年
上杉弾正家隆が大友の家人として、狩生地方を領し、河
瀬ヶ城に拠つたとある。

この頃佐伯氏は、宮方にたじたため、領家職を戸次氏

に預けられ、今又武家方家人の上杉氏の監視下にあった
ともいえる。

一三四六年(南朝正平元年、北朝貞和二年)と翌年に
なると、いろいろ支那が見られる。五月には、角邊一揆
において、尊氏の論功行賞が行われている。

その下文とは、具体的には、佐伯基佐伯山城守跡と、同
西小佐井御草野筑後入道の跡と地頭職を、恩賞として角
邊一揆によっている。

角邊とは、尊氏が九州から上洛のとき、大友氏泰が尊
氏に従わせ、豊後勢のことで、一揆とは、異姓者の団結の
ことである。

当時山城守は、肝付氏の討伐に従軍して、いるから、角
邊一揆の不参加には問題はないが、のちに官方寄りな表
明したため、先の戸次氏に領家職を預けられ、この年の
五月には、戸次氏から角邊一揆によえられたことになら
ず、受領者が誰であるか明文はないが、一揆の連署には
大神姓と名、近隣の武士名、野津氏、津久見氏の名が見
え、主として弱小の国人領主層である。

一三四七年(正平二年)になると、そろそろ官方の勢力
挽回が緒についてくる。

九月に、阿蘇惟隆が一揆や将兵の恩賞として、宮に注
進した文書がある。その「官軍等恩賞所望調所地事」の
一葉分中に、

跡事

一、白石左衛門次郎道秋中、恩賞豊後国堅田次郎入道
と記し、更に法進調所指合所所事の中に、

一、堅田次郎入道跡、可注申所領名也
とある。これは堅田次郎入道が武家方であったことを証

し、その領地が官方としては調所となるため、一族の恩
賞として宮に注進されたものである。この堅田次郎入道
が誰であるかはつきりないが、宗家の山城守が官方であ
った頃、堅田の佐伯一族が武家方であったことになる。
そして、同年十一月九日には、佐伯基佐官方に支配さ
せようとして、官方の五條頼元から阿蘇惟隆に下した令
旨がある。

「豊後国佐伯庄地頭職事、令支配官軍等、可申下令旨
者、征西大将軍宮御氣色如此、仍執達如件。」

以上の二文書は、この年の秋を期して、官方の勢力が

佐伯荘に浸透しつつあったことを立証するものである。

そして懐良親王は、この年の暮らなって、阿蘇惟隆時、
惟隆らに迎えられる。翌年一三四八年(正平三年)の四月

に、西征府を隈府におき活動を始めます。

次に日向国史には、この年の六月、新檢非違使に任
せられた伊東祐持が、京都に赴任の途中、佐伯兼房修理惟
長の館に立ち寄ったことが記されている。

この佐伯兼房修理も、伊東氏と親縁関係であったらし
く、片也由朝方の菊池氏、片也北朝方の伊東氏と、一世
紀にわたる子孫時代の親縁関係が、ここから見て、副産物
として微妙な関係をうかがっている。

なお、少しつけ加えるならば、この兼房修理は、大神
姓佐伯氏の系図では、六代惟宗の晩年の子で、惟長・兼
房修理亮とあり、その末女が伊東氏室とあるから、両氏
は義兄弟の關係である。そして兼房が現在の上阿比定
されるならば、上阿郷の一族と堅田入道一族とが武家
方近く、宗家の山城守は先に書いた菊池氏と義兄弟の
關係から官方になっているが、宗家の所在地は、上阿郷

や堅田郷を自ら除くことが出来るのではないかと考えている。

(二) 筑後川の戦

懐良親王は、一三四八年(正平三年)隈府に西征府をおき、阿蘇惟澄を副朝の大官司職に任命し、官方の整備をする。ただし、惟時は孫熊丸をついだ常石彦を吸収して、北朝大官司を林している。

官方の勢力が肥後バ伸びてくると、探題一色範氏は兵を起すが、惟澄は菊池武光の要請にまねいていない。惟澄は先に堅田入道の所領を求めていたが、恩賞に對する不満があったのであるうか。それとも武家方勢力がなお流動的だったのであるう。

官方の勢力挽回にあつては、北朝中央の紛争が幸いしている。すなわち、一三三九年から一三五一年にわたる「親志の擾亂」である。尊氏と弟の直義、執事の高師直を討つたため一旦南朝と結び、のち再びそむくことになる。

この時、大友氏時と同じように尊氏と行動し、高崎城に籠っているが、官方は、一三五五年(正平十年)に肥後から肥前・豊後と攻略し、九州一円をほぼ平定する。これは、一三五八年(正平十三年)頃である。この年四月に尊氏も病没する。

しかし大友氏は、この年十一月に再び反旗をひるがえし、翌正平十四年三月、武光は望後に向かうが、この時高崎城の勝敗は決していない。この間隙に、官方であった少貳頼尚は、阿蘇惟村と組んで背後を襲っている。惟村は惟時の実子でありながら、宗家惟時の養子となり、のちに頼子が對立するが、この時惟澄は全く動いていない。

以上のような状態の中で、一貫して官方を支持したのが菊池氏だけである。阿蘇氏が時代に応じて変化があるように、佐伯氏も多分に日和見の傾向があった。前記貞遠一揆中の下文(一三四六年)から官方の九州平定まで、当然官方寄りと思えるが、一三五九年(正平十四年)の筑後川の決戦には、大友麾下として武家方に従軍し、山城守の名が「鎮西要略」の中に見える。

だから、佐伯氏宗家の山城守は、資料に見る限り、官方寄りとして所領を没収されながら、いざという時は、必ず大友氏と行動を共にしている。一族の龜阿修理や堅田入道の武家方にはさぞおれ、更に貞遠一揆の連署に、豊後頼小領主管六十七名の記名がある状態下で、山城守が菊池氏との親縁関係の義理を、官方へ通し得ずかつたと見なければならぬ。

(ホ) 官方全盛時代と衰退

官方は一三六〇年(正平十五年)、大友阿蘇と結ぶ少貳頼尚と大宰府に攻め、翌年大宰府から進み出し、八月に九州を統一する。これからしばらく官方の全盛時代となるが、しかし北朝側は、この年探題斯波氏を九州に送り、氏経は大友氏時を頼って高崎城に入る。この時も阿蘇惟村は氏経方へ参加しているが、惟澄はどちらにも組みしていない。

この時期に、佐伯氏については全く資料がないが、五年後、正平二十年になると、院宣が山城守に下っている。この頃は、並川義行探題が下向しているが九州に入れば、のちに長門の大内引世は武家方、伊予の河野通直は官方に頼り、九州に再び争乱時代が訪れようとしている時である。

この山城守に下った院宣は、北朝光厳の院宣でありながら南朝の年号を記載し、戦乱期の錯綜を思わせる不思議をもつてある。

伊予の河野通直が大宰府の室方へ参会するのは、「鎮西要略」によれば一三六九年（正平二十四年）としているが、同書によれば、通直はその後輩後入りし、肥後菊の高田三郎と菊池武政の竹中陣攻めを救援し、その耕をかって臼井を攻め、翌年まで佐伯に駐屯している。佐伯に對する攻撃でなく、滞留地として佐伯の土地を遊んたことも考察すべき問題である。この頃、後村上天皇の皇子良成親王は、四國に渡り九州と鎮んで勢力の挽回をはかっている。

しかし、一三七一年（建徳二年）になると、標題は今川貞世に代わり、子義範は田原氏能に守られて、尾道から落路高崎城に入る。翌年にかけて、菊池武政との高崎城の攻防は百餘回に及ぶといわれるが、高崎城はなかなか落ちず、北朝方拠点の役目を果たしている。

その後、武家方は三月に大宰府を奪回し、宮方の中心であった菊池武光もこの頃病死し、一三七五年（天授元年）になると、今川貞世は菊池を攻め、暮には中國の大内義弘の機軍を得て、肥後の白木原で菊池武朝を破り、再び武家方優勢時代となる。

そして、一三九二年（元中九年）南北朝合一とともに、征府も終りを告げ、室町時代となる。

以上大ざっぱに南北朝時代の佐伯氏、とくに山城守を述べてみると、佐伯氏の統帥として苦悩の一生であったことが判然とする。幕府方に睨まれ、自國の要塔と宮方への義理を考えても、最高の浴者であった行跡が、数

少ない資料を通してみることが出来る。武家方の佐伯氏一族とは、戦乱期の當面手段として、暗黙の了解があったとも思われ、また各時代に応じて先通しの良さは、武將とともに大へんを政治家であったといえよう。

しかし、正平二十年の院宣と最後の、山城守の必は諸文献から名を消してしまふ。そこには次代の九代惟世との年代的考証や、代に入らなかつた理由、あるいは山城守の時代の通して、河野通直の駐屯や、市福所の「落龍塔」の歴史史關連事項が浮かんでくるが、これらはおくまで推測によるため、後日、随想風にその疑問点をまとめてみたいと思ふ。

(終)

俳句

菊 日和

日菊也 庭に余りて島まで

藝村の句です。村里に柿の実が色づく秋、友を訪へて、意外に風景に接する。

元元は、それこそ読んで前つて下さる、うれしみのです。

菊日和 夜は満月をかかたたり

これは富安風生の句、分風十六号以来快晴の月が十六日つづきました。福のぬねは春ま化て、農家はますホッと

しています。七と雨かば、いかに下句から来月上句にかけて、よく晴れ渡った天気がつづく。

それが菊日和です。夜はいと寝むか、樹の成

いと寝むか、味わいくらべてください。(通)